

### エクステンションセンター公開講座 関東大震災100年 復興・防災を考える

エクステンションセンター興という言葉が広く使われるようになったのは関東大震災から100年前置きの100年、日本では震災や戦災の後、都市計画に基づき行われる土地区画整理をベースにした公共土木事業が「復興・防災を考える」と題して講演した。

今年が関東大震災(1923年)から100年にあたり、頻発する自然災害に、復旧・復興や、次の災害に備える防災への関心が高まっている。

大矢根教授はさまざまな被災地に足を運び、調査をしながら復興の手助けをしている。日本で復興

定めて、自治体に提案、それが国の公共事業として実行された。さらにその見は東日本大震災でも取り入れられた。

大矢根教授は「復興とはハードな都市基盤再整備だけではなく、本来的な中心は、損なわれた社会関係の再構築の過程(課程)である。その体験を次の被災地になき学びあうことで、自分たちの復興は間違っていない」と話した。

の経験は本にまとめられ、北海道・有珠山噴火災害、東京都・三宅島噴火災害、新潟県・中越地震へとつながり、その知見は東日本大震災でも取り入れられた。

大矢根教授は「復興とはハードな都市基盤再整備だけではなく、本来的な中心は、損なわれた社会関係の再構築の過程(課程)である。その体験を次の被災地になき学びあうことで、自分たちの復興は間違っていない」と話した。

再確認し腑に落ちる経験につながるようになる。

さらにはその知見が広がり一般化して、法律の整備や制度化など、社会的実装につながる」とまとめた。

10月14日は防災をテーマに講演した。

### 企画展 関東大震災と専大

関東一円を襲った関東大震災は、本学にも大きな爪痕を残した。その被害と復興を振り返る企画展「関東大震災と専大」が神田キャンパス5号館で、10月24日まで開催されている。専修大学は、本学にも大きな爪痕を残した。その被害と復興を振り返る企画展「関東大震災と専大」が神田キャンパス5号館で、10月24日まで開催されている。



に焦点を当て、今村法律事務所が担当した震災関連の訴訟について、パネルと訴訟資料で紹介している。

第2部では「その時、専修大学は？」と題し、本学の被害や復興の歩みをたどった。神田周辺は火災が激しく、専大は図書館倉庫外壁の一部を残して全壊した。すぐさま校舎復興の稟議が起草され、11月には立教大学の校舎を借り授業を再開。震災3カ月後は焼け跡に仮校舎が完成し、年明けから仮校舎で授業を行った。こうした大学の歩みと合わせて、再建支援に奮闘する学生や卒業生の姿も紹介した。

### 増田教授が就任

法学部の増田英敏教授が公益財団法人租税資料館の代表理事(理事長)に就任した。

租税資料館は、中野区にあり、国内最大の租税に関する専門図書館。また、学術研究支援機関として、租税法の研究成果の顕彰、留学や調査・研究の助成を行っている。

増田教授は租税法が専門。就任は今年6月。

### 戦後政治と首相演説

岸田文雄首相は2023年1月23日、第211回通常国会の衆参本会議場において恒例の施政方針演説を行った。その際「政治とは、慎重な議論と検討を積み重ね、その上」に決断し、その決断について、国会の場に集まった国民の代表が議論を、最終的に実行に移す、そうした営みです」と述べた。だが、首相の優柔

不断なさまは、その後のコロナ対策、マイナンバーカード、および閣僚の不祥事などへの一連の対応で明らかで、マスコミや国民の批判を浴びた。本書の内容は、戦後政治の状況を踏まえて、歴代首相の施政方針演説と所信表明演説をとり上げ、何の訴え、どのような政策を行うとしたのか、その内容を批判的に論じている。

続く第2巻から第4巻では、1965年以降の首相演説を扱う予定である。(専大出版局・税込3740円)

著者(ふじもと・かずみ) 名誉教授。政治学。



### 社会知性開発研究センター ソーシャル・ウェルビーイング研究拠点

#### 若手研究者育成ワークショップを開催

社会知性開発研究センター/ソーシャル・ウェルビーイング研究拠点(研究代表者: 嶋根克己人間科学部教授)は、9月5~7日、若手研究者育成のための「Early-Career Researchers Workshop 2023」をインドネシアで開催した。対面とオンラインを合わせて、日本及びアジア7カ国・地域(タイ、インドネシア、フィリピン、ベトナム、モンゴル、韓国、台湾)の研究者26人が参加した。

初日は首都ジャカルタで活発に意見を交換し、都市開発プログラムにより生成された社会的・文化的特徴を学ぶことを目的に、フィールドトリップを行った。オランダ植民地時代の統治拠点だった旧バタビア地区を見学し、歴史・文化遺産を保存しつつSDGsにも配慮した都市再開発プロジェクトについて、ジャカルタ市の担当者や建築の専門家からの講演を聞いた。

6、7日は、インドネシア大学デポックキャンパスをメイン会場として、ハイブリッド形式でのワークショップ・セミナー及びシンポジウムを開催。四つの若手グループ研究の進捗報告と議論、インドネシア大学社会政治学部社会学研究室との共催シンポジウム

### 村上天名教授に感謝状を授与

越前道博物館 村上天名教授(元経済学部教授)に9月12日、ベトナム報道博物館から感謝状が授与された。村上天名教授はベトナム戦争当時の新聞や雑誌などを体系的に収集してきた。その貴重な資料を報道博物館に寄贈したことに対して感謝状が贈呈された。

### 嶋根教授に功労賞

VASS 9月15日に開催されたベトナム社会科学院(VASS)東北アジア研究所(INASS)と専修大学が共同で開催した功労賞が授与された。これは同教授が長年にわたりVASSと専修大学の関係強化に大きく寄与してきたことを賞するものである。

### 会計人会寄附講座 校友税理士が「税」を解説

校友会の専修大学会計人会が提供する寄附講座「税理士租税講座特論」(国田清志商学部教授)が神田キャンパスで開催されている。

会計士・税理士として活躍する卒業生が交代で講師を務める全15回の講座で、租税や税務会計、監査制度などについて学修する。確定申告書を模倣作成する回もあり、実務に即した内容を学べる点も大きな特長だ。初回の9月21日は、会計人会会長の榎本恵一さん(昭61商)が「税とは何か」をテーマに講義を行い、商学部と法学部の3、4年次生約30人が聴講した。はじめに、税の原則や



により、納税の義務を負う」という条文を引いて租税法の重要性に言及した。

税制において重要な公平性について、税負担の公平性を保つために日本には約50種類もの税金がある」と説明した。

榎本さんは「税金とは一生付き合わなければならない。必要な知識と知恵を身につけ、賢く生きてほしい」と後輩たちに語りかけた。

途中でクイズを挟むなど、講義は硬軟織り交ぜた内容で、学生たちは真剣に、そして楽しんで租税について学んでいた。

浅利一希さん(法3)は、「この講座では実務の側面も学ぶことができ。将来は税務関係の道に進むことも考えており、ここで得た知識を生かしたい」と話した。

### 専修人の新しい本

この自由な世界と 私たちの帰る場所

河野真太郎 著

本書は新自由主義とポストモダニズム時代におけるジェンダー(ポストフェミニズム)における感情管理、トランス排除、男性性の問題)を、さまざまな映画作品を媒介に論じる前半と、レイモンド・ウィリアムズ、宮崎駿、桜庭一樹、ヴァージニア・ウルフ、村上春樹らの(文学)作品を論じながら、ポストトランプ的、ポストトランプ的文化研究。

映画とジェンダー研究、イギリス文学とリサーチの成果で、多岐にわたる文章が収録されているが、とりわけウェルズ文学論を世に問えたこと。どこから読んでもいい本だが、個人的には、ウィリアムズの小説『ラック・マウンテンズの人びと』と人新世について考察した第五章が白眉だと考えている。(青土社・税込1980円)

著者(こうの・しんたろう) 国際コミュニケーション学部教授。英文学・文化研究。